

暗闇のなかに輝く光を

阿部 拓也 | TAKUYA ABE

2011年、東日本大震災の夜、灯りの消えた街は暗闇に包まれました。

その中で灯されたろうそくや夜空の星を見て、光は闇のなかだからこそ尊く美しいと知りました。

あの暗闇と光をイメージして、紙やインキ、印圧や刷り順などで探求した黒でストーリーをつくりました。

さまざまな黒と、さまざまな光。漆黒のなかの輝きに、希望というメッセージも込めています。

ABOUT TRIAL

トライアルについて

●トライアルの背景

おとし、赴任先の仙台で東日本大震災に遭遇しました。ライフラインが途絶えた街で過ごした数日間、その後しばらく経って直に目にした被災地の状況は、僕のこれまでの価値観を大きく揺るがしました。大自然の驚異の前では人は本当にちっぽけだと痛感する一方で、この体験を伝えたいという思いを抱くようになったんです。

そんな時、トライアル参加の話をいただきました。テーマが『燦』だと知り、あの日、暗闇の中で感じた光を表現したいと思いました。同時に過去のトライアルを調べながら新しい切り口を探そううちに「黒」というキーワードを見つけ、オフセット印刷でどこまで黒の表現の幅を広げられるかに挑戦し、闇の中に輝く光を表して、被災地の人間として伝えたいあの日の体験を5枚のポスターに表現することに決めました。

●制作コンセプト

ポスターは1枚目から5枚目まで、時の経過に沿ったストーリーになっています。1枚目の『ちいさな希望』は、震災当日の夜、毛布にくるまりながら余震におびえて過ごしていた時、唯一の明かりとして心の支えになってくれたろうそくの光をモチーフにしています。

2枚目の『星たちは語る』では、1枚目と同じ日の夜空を描きました。夜、外に出て空を見上げると、そこにはこれまで仙台の街中では見たことがなかったような満天の星空がありました。もちろんすべての電気が消えていたからなのですが、本当に考えられないほどの星が輝いていたんです。あの日の星空は後になってからもいろいろな人たちと話題にあがったのですが、その時、「あの星の数はもしかしたら被災された方々の姿なのかもしれないね」と話をしたことがあります。そんな当時の状況や感情的な部分もオーバーラップさせました。

3枚目は『街の灯』。震災から数日経ち、ようやく電気が復旧し、街に灯りが点った時の光景です。明かりが戻った時の感動やほっとしたイメージを表現できないかと思



い、黒いインキを使わずに暗闇をつくってみました。

4枚目は『明日はくる』、海と朝日の1枚です。大きな被害をもたらした海を希望へ繋げようと、朝日が徐々に昇っていく景色をイメージしています。

最後が『生きていこう』。時とともに自分の中に芽生えてきた、生きていこうという希望を表し、5枚のポスターの締め括りにしました。

●制作のポイント

5枚はそれぞれ、トライアルでつけた黒と光で表現されています。1枚目の漆黒の闇は、CMYとスミの刷り順による発色の変化で奥行きを出した闇に、やわらかなろうそくの光を灯しました。星空は、角度によって色が変化する蒸着紙にスミ、銀、オパークホワイトの3色のインキというシンプルな構成です。実際に用いた手法の種類よりも多彩な表情を生み出すことができました。

久しぶりに街に明かりが灯った日の景色はスミを使わずに、逆に海と朝日は色を使わずに蛍光メジウムやニスによるモノトーンの色幅だけで表現しました。最後の1枚では黒い紙色を暗闇に見立て、さまざまな光を集めて浮かび上がらせてみました。

さまざまな闇に浮かぶさまざまな光。暗闇だからこそ希望の灯は明るく輝いてくれるように思います。

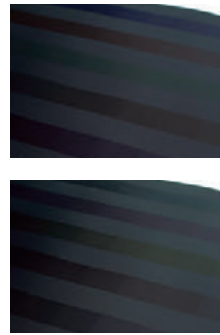
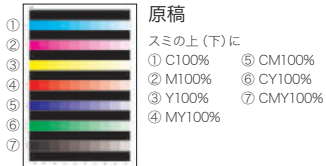
01

インキによる「黒」の生成

「黒」と言っても、質感や色み、深さや濃度によって表情は大きく変わります。インキや紙、刷り順や表面加工などの印刷技術で、どんな表情の黒を生み出すことができるのでしょうか。スミ100%の黒が、下地やコーティング、インキの掛け合わせなどによってどう変化するか、PDと一緒に考えながら、一つずつ整理してみようと思います」

黒の色み

スミに色を重ね合わせて色みのある黒をつくる実験。スミの刷り順違いを検証した。

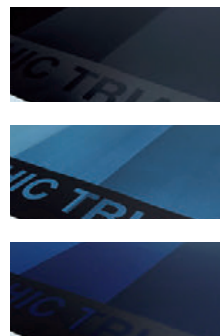


スミを最初に刷る：
スミの上にベタで色に乗ると、黄は緑、マゼンタはオレンジというように、本来のインキ色と異なる色みが出た。

スミを最後に刷る：
色の上にスミが乗るとそれぞれの色の違いがはっきりと出て、本来のインキ色に近い印象になった。

黒の質感

スミを印刷した上に表面加工をし、黒の質感をつくる実験。各種ニス以外にも、偽造防止用の蛍光メジウムやコーティング剤のテクノフも使用した。刷り重ねの効果を確かめるために1~3回刷り重ねた。(右から1、2、3回刷り)



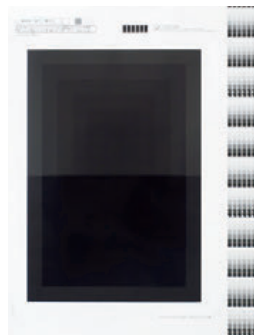
グロスニスで表面加工：
刷り重ねるほどツヤが出て、黒が濃くなった。上品なイメージに仕上がっている。

パールニスで表面加工：
刷り重ねるほど明るく、青みを帯びたライトグレーになった。ひんやりした印象。

蛍光メジウムで表面加工：
キラキラ輝く印象の、強い群青色になった。刷り重ねるほど深い色になっていく。

黒の深度

版を重ねて深みのある黒をつくる実験。スミを刷り重ねる設計で、中心部分に行くにつれて版数が多くなっている。下半分にオベークホワイトを下引きし、その差も確かめる。



中心に向かって黒が深くなっていく。オベークホワイトを引かない上半分では階調がはっきりと出て奥行きが感じられる。一方、オベークホワイトを先に刷った下半分は、より深く、より艶っぽい黒が表現された。

蛍光メジウム
無色透明のインキ。ブラックライトなど紫外線光で発色し、偽造防止などに用いられる。

テクノフ™
フッ素コーティング剤。汚れ・キズ防止に、表面加工用のインキとして使用する。

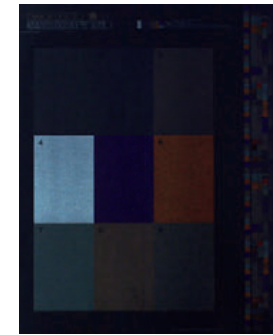
02

インキと紙による「黒」の生成

「黒に色みを感じさせるなら、黒に頼らないで黒に近づくとする方法もあるのではと考えました。そこで、モノトーンのインキや紙色で黒を表現するのではなく、色によって黒をつくりだす実験をすることにしました。補色の色を掛け合わせたり、インキを重ね合わせたり、色紙を使ってみたり、思いつく方法をいろいろ試してみます」

黒紙による黒の表現

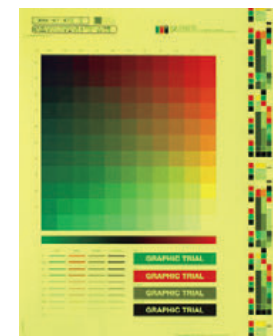
インキによって紙色がどのように変化するかを実験。数種類の黒い紙に、プロセス4色やニスを刷った。



プロセス4色は色がはっきりと、パールニスは白濁した強い光沢が現れた。予想外だったのはマットスミが赤く発色したことで、どの紙でも同様の現象が見られた。
用紙：スーパーコントラスト(スーパーブラック)

色紙による黒の表現

色紙に、スミ以外のインキだけで黒が表現できるかどうかを実験。理論上は補色同士を掛け合わせれば黒になるため、黄色の紙には紫、青の紙にはオレンジのチャートを作成した。



黄色の紙に印刷：
M100%×C100%の掛け合わせ。ボールペンのような濃密な印象の黒が現れた。
用紙：イルミカラー(黄)

青色の紙に印刷：
M100%×Y100%の掛け合わせ。かなりの濃度をもった黒になった。
用紙：イルミカラー(青)

暗いインキによる黒の表現

3色分解した写真を明度の低いCMYで刷る実験。黒でありながらも微妙な階調がつかれないか試みた。インキはCMYそれぞれにスミを50%ずつ加えている。



白い紙に印刷：
ほとんど色みは感じられないモノクロの写真のようなイメージに仕上がった。
用紙：オーロラコート

黒い紙に印刷：
色のかすかな発色が、逆に鮮やかな印象を与える不思議な表現となった。
用紙：スーパーコントラスト(スーパーブラック)

リッチブラック
CMYKを掛け合わせてつくる黒のこと。単色のスミベタの黒よりも濃度が濃くなり、より強い黒になる。

03

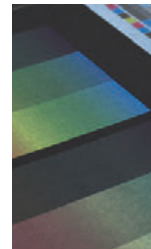
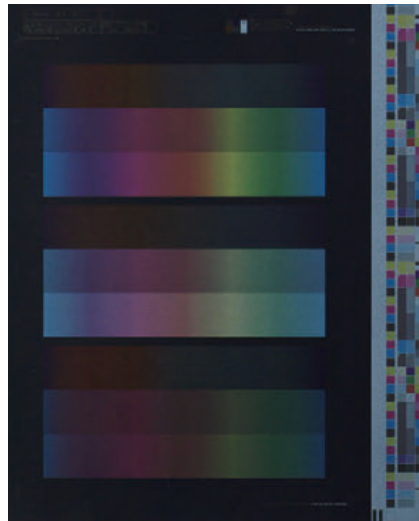
インキと紙による「光」の生成

「暗闇の中に浮かび上がる光の表現を探します。明暗のコントラストでさまざまな“暗闇のなかの光”を表現できるように、光表現のバリエーションをつくり出す実験です。紙とインキと絵柄という3つの要素を組み合わせ、暗さを引きだせる明るさと、明るさを引きだせる暗さを、光の切り口から探していきます」

黒い紙で光のスペクトルを表現する

黒い紙で光を表現するために、色の発色を確かめる実験。オペークホワイトで紙色を隠べいした上にCMYのグラデーションを刷り、発色とともに階調がなめらかになるかどうかを検証した。CMYはプロセスインキと蛍光インキを試した。

インキと刷り順：オペークホワイト(2回刷り)→C→M→Y
用紙：スーパーコントラスト(スーパーブラック)



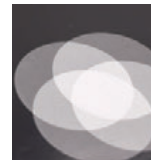
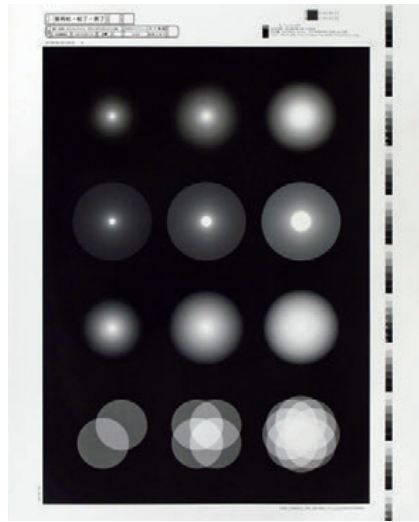
プロセスインキ：
オフセット印刷では紙色を完全に隠べいするのは難しい。その結果、黒い粒子がざらつきのようなイメージを創出した。



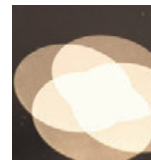
蛍光インキ：
蛍光インキの彩度の高さが実際の発色以上に効果を発揮して、虹のような透明感のあるグラデーションを生み出した。

1色のインキで光を表現する

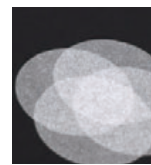
グラデーション、線描、ドットの密度、透過表現など、光のグラフィック表現のバリエーションの実験。どの形をどのインキで何の用紙に刷るといけば効果的か、さらに明るさと暗さをどのレベルに設定するともっとも光らしい表現となるかを探った。明快な答えを引き出すために、あえて版数を最小限に絞り込んだ。



スミ：
光の質感を担わせやすいツヤのある紙を用いた、光のもっともベーシックな表現。
用紙：ミラーコート



スミ：
色と光沢が光の揺らめきに似た紙の力を借りた。シャープな形で効果がある組み合わせ。
用紙：クニメタル(ホワイト)

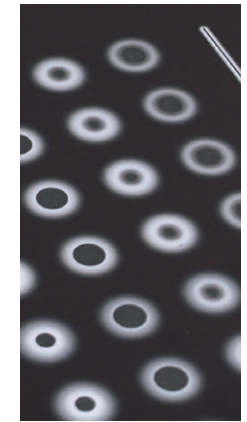
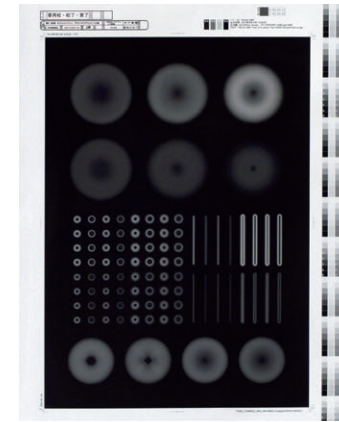


銀：
1回刷りでも紙色を隠べいし、はっきりとしたコントラストを現出している。
用紙：スーパーコントラスト(スーパーブラック)

白い紙で光を表現する

紙色を生かしながら周囲の“闇”の部分をスミで表現する実験。拡散していく光を表現するためにグラデーションを多用した絵柄を、インキと紙のさまざまな組み合わせで刷ってみた。

用紙：ミラーコート

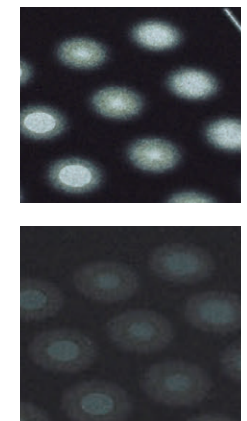
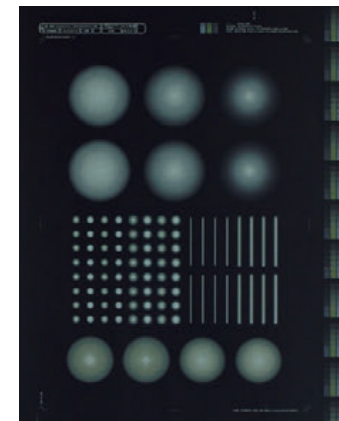


スミ+薄銀+銀+マットスミ：
見る角度によって光の輪郭が見え隠れし、星のきらめきのように輝いている。

黒い紙で光を表現する

こちらは黒い紙色を“闇”に見立て、光をインキで表現する実験。しっとりした質感で深い黒色をした紙を採用した。フェアドット製版で、なめらかなグラデーションを目指している。

用紙：スーパーコントラスト(スーパーブラック)



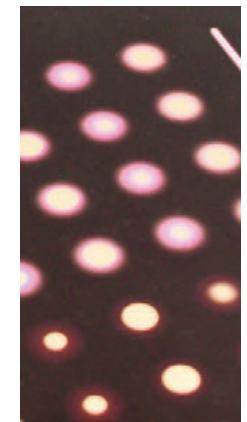
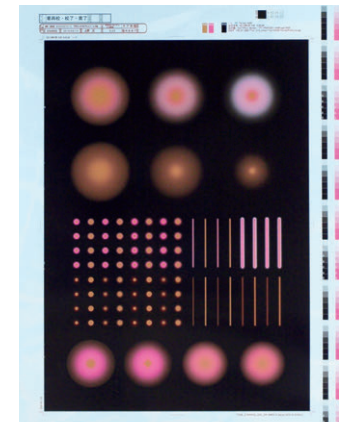
ホワイト+蛍光イエロー+パールニス+オペークホワイト：
白の粒子が飛び交って見える。面においては間接照明のような表現が生まれた。

蛍光イエロー+蛍光メジウム(3回刷り)+ホワイト(2回刷り)：
蛍光メジウムが予想外にも赤みを帯びた。ぼんやりとした明るさが不思議な印象になった。

表情のある光を表現する

表情のある表現を狙った実験。金と蛍光ピンクという暖色系のインキと、揺らぐような輝きが特徴の紙を使用した。夜の街に並ぶあたたかい光のような、個性ある光をイメージして設計した。スクリーン線数はフェアドット。

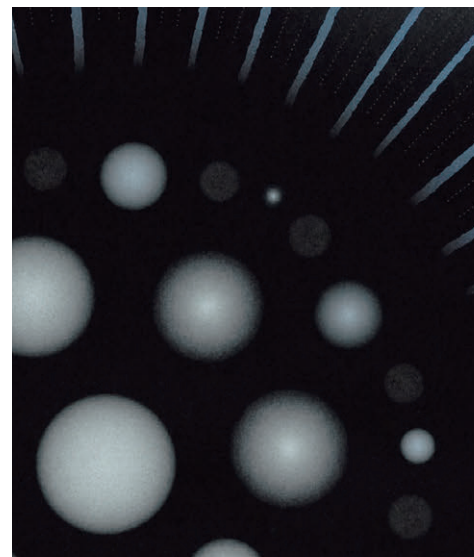
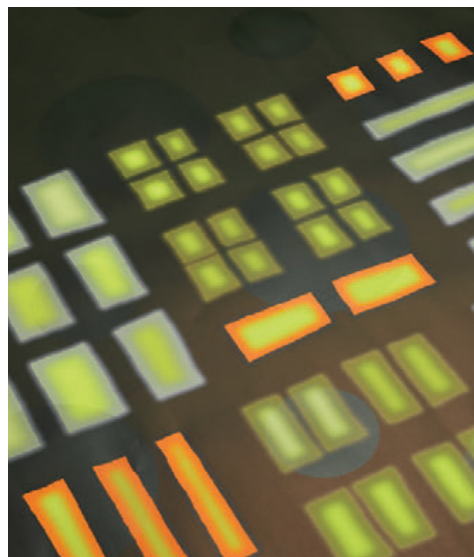
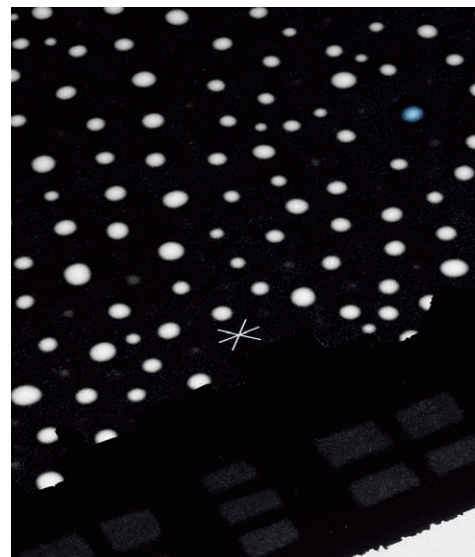
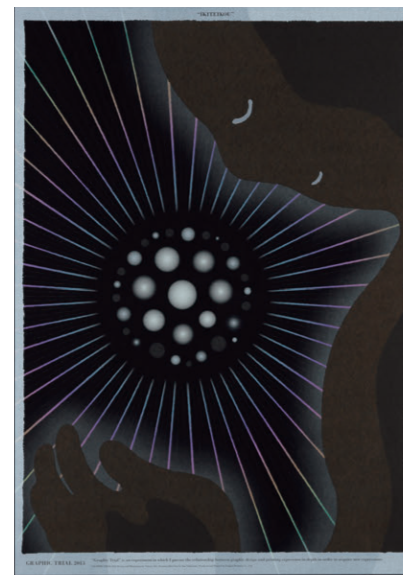
用紙：クニメタル(ホワイト)



スミ+蛍光ピンク+金：
虹色に輝く表現を狙い、色みを帯びた蒸着紙とインキを採用。あたたかみのある光のイメージになった。

FINISH

全作品とディテール



Design&Illustration : 阿部 拓也



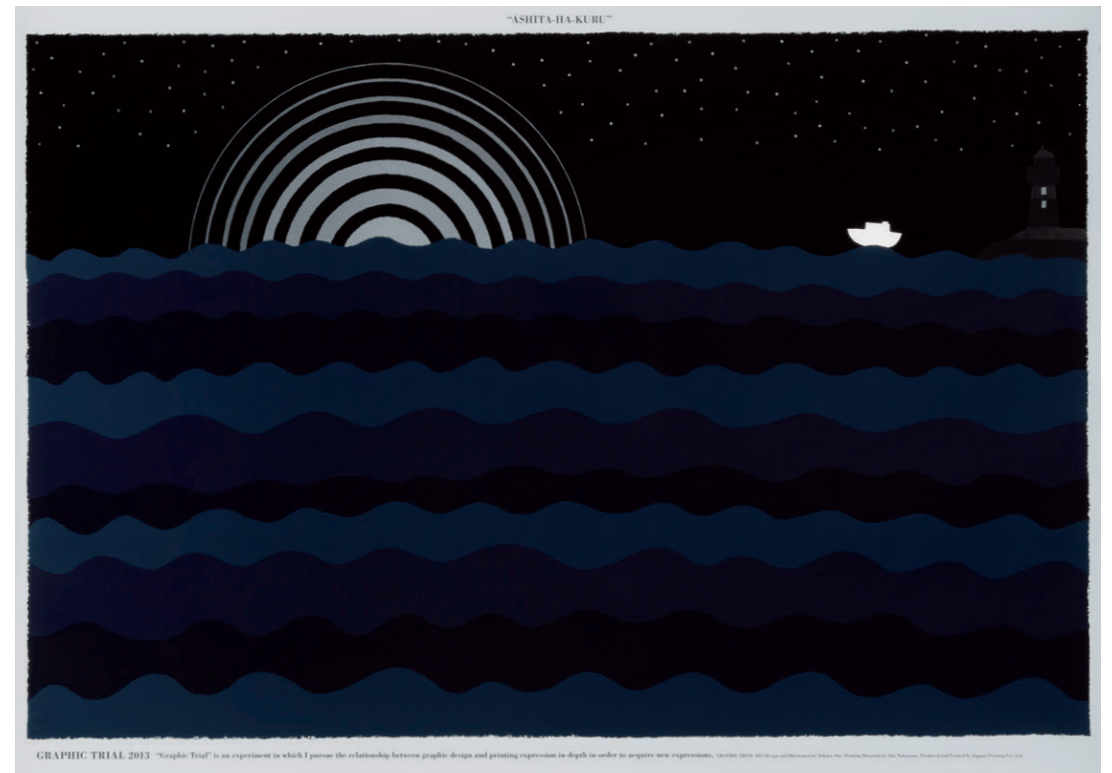
「ちいさな希望」
 用紙：HSホワイトハミング 四六判 94kg
 版の構成：スミ→シアン→マゼンタ→イエロー→パールニス→蛍光ピンク→金→スミ→グロスニス→オペークホワイト（2回刷り）→スミ



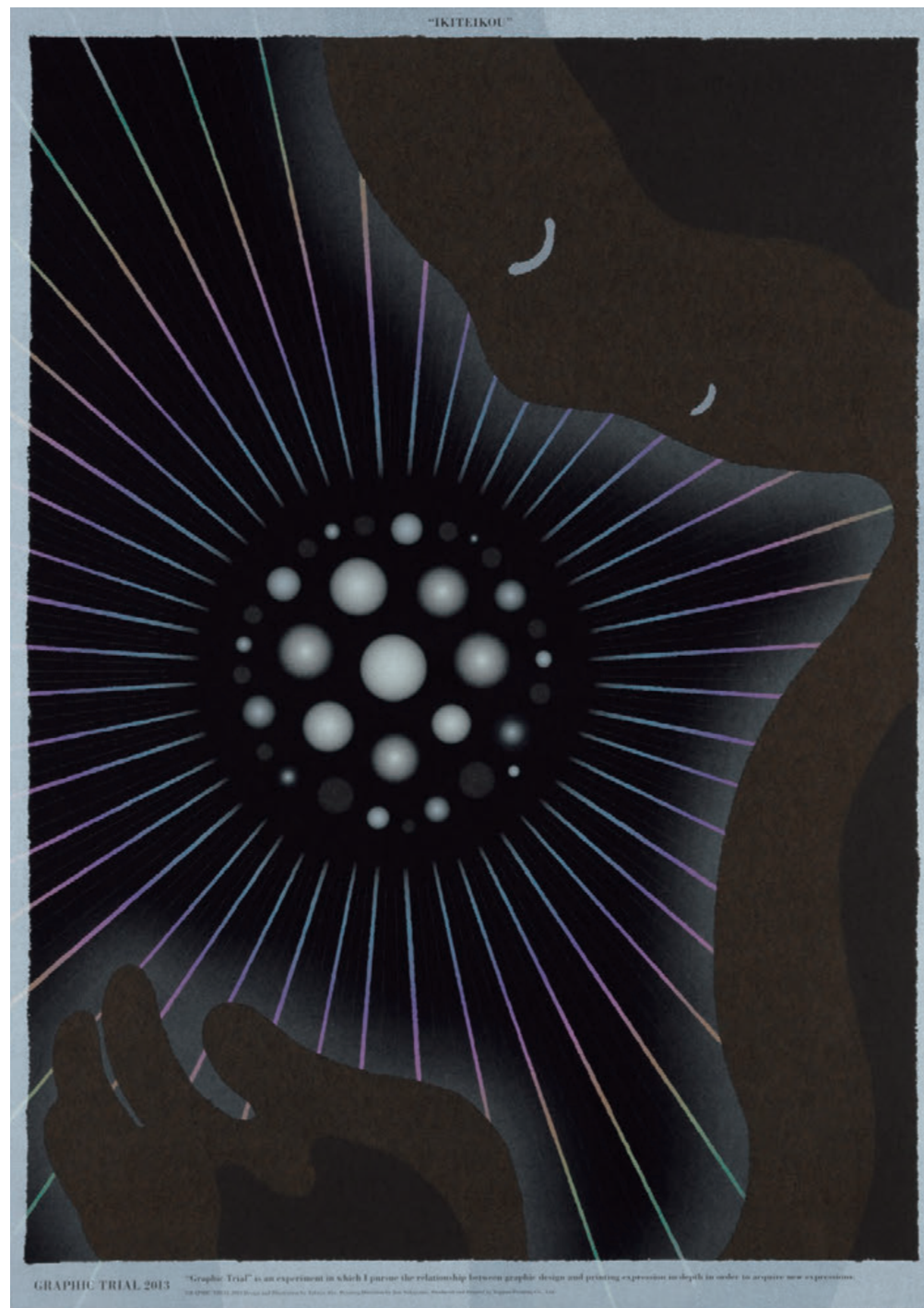
「星たちは語る」
 用紙：クニメタル/ホワイト 800×1100 27.5kg
 版の構成：オペークホワイト→銀→スミ→銀→スミ→オペークホワイト（2回刷り）→スミ



「街の灯」
 用紙：イルミカラー／黄 四六判 80kg
 版の構成：特色紫→シアン→マゼンタ→金→銀→蛍光ピンク→オペークホワイト→グロスニス→オペークホワイト（2回刷り）→スミ



「明日はくる」
 用紙：オーロラコート 四六判 135kg
 版の構成：スミ（2回刷り）→パールニス→パールニス→パールニス→グロスニス→マットニス→マットニス→マットニス→蛍光メジウム→蛍光メジウム→蛍光メジウム→オペークホワイト（2回刷り）→スミ



「生きていこう」

用紙：スーパーコントラスト/スーパーブラック 四六判 160kg

版の構成：オペークホワイト→シアン→蛍光ピンク→蛍光イエロー→パールニス→オペークホワイト→蛍光メジウム（3回刷り）→オペークホワイト（2回刷り）→マットスミ→スミ→特色銀（グロスニス混入）→オペークホワイト（3回刷り）→スミ

AFTER TRIAL

トライアルを終えて

●トライアルを終えて

さまざまな技法のなかで、オフセット印刷は大きなロットに対応できて、しかも精度の高い再現が特徴です。それだけにハイテクな印刷だというイメージが強く定着していますし、技術はどんどん進化して、機械も日々新しくなっています。

それはもちろん間違いのない事実ですが、今回のトライアルを通して、僕はオフセット印刷も石版やシルクスクリーンと同様に、人の手によって生まれる“生きもの”だと改めて認識させられたように思います。実験を重ねることに印刷の予測不能な領域を実感し、いつしかその魅力に取りつかれていました。豊かな表現が生まれる現場に接し、印刷がどれだけ奥深いものだったのかを再発見したように思います。

とにかく面白かった、の一語に尽きます。最初のトライアルでは、頭の中で予測できるようなものも含みながら実験を行ったにもかかわらず、蛍光メジウムとスミの掛け合わせが生んだ思いがけない群青色や、オペークホワイトとスミを重ねた時の発色には心からビックリさせられました。「印刷ってこんなに面白いんだ！」と今さらながらに感動し、どんどんのめり込んでいきました。プリンティングディレクターの仲山さんと話し合いながら新たな手を考えていくプロセスも、そこで得た着想からさらにアイデアをふくらませて入稿データをつくることも、ドキドキしながら刷り上がりを待つ時も、どのプロセスもライブ感がいっぱいです。実際に楽しい時間を過ごすことができました。

考えてみればインキも紙も人がつくったものですし、機械を扱い刷り上げるのはもちろん人の手によるわけです。そうやって考えてみれば、同じように見えてもぎっと毎日、同じように見える印刷物にも何かしら微妙な差異は生じているに違いありません。

やっぱり印刷物は“生きもの”なのです。印刷物が“生きもの”となる瞬間に立ち会う、そんな幸せが味わえたトライアルとなりました。

— 阿部 拓也

●プリンティングディレクターから

阿部さんのトライアルには物語と技術という二つの側面があります。物語の面では震災という、2年前に日本に住んでいた人なら誰もがわかる共通事項をベースにしたストーリーでわかりやすく構成されています。技術の面はとにかくいろいろなことがありました。入稿データのほとんどがチャートで、普通の人が見たらよくわからないものばかり。そこに一つずつインキをあてはめ、刷り順を決めていきます。「こうしたらどう?」「これは変えよう」と一つずつ話をしながら詰めていく、けっこう地道な作業です。予測がつかない箇所は僕自身も密かに楽しみにしながら、面白そうな組み合わせを選別してトライアルに挑みました。

この作品は、ぜひマクロとミクロの両方の視点から観てほしいと思います。まずは俯瞰してビジュアルの美しさや全体の世界観をマクロな視点から観てください。できれば、目で見た姿だけではなく質感までも含めた“モノ”として印刷物を感じてほしいと思います。それからぐっと近づいて、今度はミクロの視点から。「スミを使ってないの?」「どうやってこの色になったのかな」と、ディテールで気づく印刷テクニックや表現手法に着目しながら眺めると、さっきとは違う楽しみ方ができるはず。そして再度マクロな視点に戻り、ミクロな視点に戻り…とくり返すと、重層的かつ多面的な新しい見方が生まれてくると思います。

— 仲山 遵

